Title	『晒し井』論
Author(s)	西谷，博之
Citation	聖学院大学論叢, 15(1): 124-114
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=198
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

『晒し井』論

西谷博之

一、序

森内俊雄『晒し井』は一九九七年五月三〇日、講談社から発行された小説で内容は一九九五年四月から一九九六年十一月までのある市井の話である。この小説はこれまでの森内の小説約二〇冊と比べると、かなり違ったものとなっている。というのはこれまでの小説は、主人公が鮮明であり、長編では一人の主人公もしくは森内を思わせる主人公がいろいろ活躍するのであるが、『晒し井』は主人公らしい主人公はいない。『晒し井』の狙いは何なのか。

二〇〇〇年二月一日の朝日新聞夕刊に「百の記憶　五十の思い出」と題して載った森内の文章がある。

お酒と煙草をやめて、ちょうど七年になる。ただやめているだけで、きびしい禁酒禁煙の誓いをたてたわけではない。しかし、今後も中止を継続するつもりでいる。九十歳を迎える幸福があるようなら、再開してもよいかな、とは思っている。

このような書き出しで始まるエッセイにより、彼が禁酒禁煙を始めてから七年間になることを然りげ無く伝えている。今年が丁度二〇〇〇年であるから、七年前というと一九九三年になるが、彼の言を信じればこの年の二月に次のような事故に出合うのである。

深酒をして階段から転落し、左手首を骨折した。ジグソーパズルのピースが飛び散ったような複雑骨折だった。

救急車によって運ばれた病院で、一徹そうな白髪の院長から、老人の三大骨折のひとつ、と指摘されたのが、ひどくこたえた。私はそのとき、まだ五十代の後半にかかったばかりだった。老いの翳りを、まったく意識していなかったから、驚愕と恥辱感に打ちのめされた。[1]

以上の引用から二つの点が指摘できるように思う。それは第一に深

酒し実際に階段から落ちて手首を複雑骨折したこと。第二は、森内はまだ五十代後半になったばかりで本人は〈老い〉などとは無関係と思っていたのに実は〈老い〉が早くも忍びよっていたことを赤の他人である病院長に指摘されたこと、である。そしてこれは引用とは無関係であるが、一九九三年六月に遠藤周作の最後の長篇小説である『深い河』が発刊されたことである。ご存知のように『深い河』には老人が多勢出てくる。同じカトリック作家として無視出来ないであろう。これらのことから森内俊雄の作品は従来のものと全く違った作品になったと私は見るのである。

彼は今まで「眠れぬ」ことを恐れるあまり睡眠薬は勿論、薬が効かなくなり鬱状態に入ると抗鬱剤を用い、中枢神経興奮剤やトランキライザーに頼り、そして飲酒でなんとか眠ろうとしたようである。森内のことであるから、そのほとんどは幻想が齎したものと言うかも知れない。そのことが彼がエッセイに書いた断酒と深く関わっているということは論を待たないであろう。そして手首の骨折で病院に担ぎ込まれ白髪の老院長に「老人の三大骨折の一つ」と指摘されては、〈老い〉などまだまだ自分とは無関係と思っていた森内にとって少なからぬ衝撃であったと思われる。今度の私の『晒し井』論はこの森内の作品と〈老い〉の関係を調べることが主であるが、森内の作品に〈老い〉が無意識のうちに忍び込んでいるのではないだろうか。この禁酒禁煙に先立つ作品の中に〈老い〉が含まれていないか、又〈老い〉の問題がどのように扱われているかを見てみたい。

森内は一九九四年一月に『桜桃』(新潮社)、一九九五年四月に『午後の坂道』(講談社)という二冊の短篇集を出した。もっとも『桜桃』は短篇集というより掌篇集といった方が良いかも知れない。まず『午後の坂道』であるがこの作品集は九つの短篇から成っている。〈老い〉を扱っているものは一番古い一九九〇年八月号(群像)の「極楽」であり、年代的に云うと一寸意外な感がしないでもない。しかし、これは自分の〈老い〉というより、他人の〈老い〉を客観視する立場に立っている。もう少し詳しく云うと、「極楽」の主人公梶野達二は「……いやひと昔まえなら彼は老年、初老と呼ばれてふさわしい年齢になっていた。髪はすでに初霜が降りて白い毛筋が目立ってきている。」人物で、ある日食べ物の食い合わせが悪かったか蕁麻疹を起し医者に見て貰う。「梶野が直視したくないのは〈老い〉だった。青年時代から精神、肉体ともに不摂生の限りを尽くしてきた。老化が早く進行してもおかしくはない。」と書くのだが、この一篇を見る限り、〈老い〉そのものよりも、〈痴呆〉症を恐れている様子が感じられる。この梶野に対する〈老い〉の扱い方は、一九九三年『新潮』九月号「桜桃」では随分深まっている感がする。『桜桃』は一九九四年一月、新潮社から発刊された小説二十三篇から成る掌篇集で『桜桃』とあるように、やはり一番秀れているのは「桜桃」であろう。満八十歳を迎えた越智晴展は妻豊子を連れて散歩を兼ねてデパートへ買物に行く。彼は五〇〇グラムのサクランボを買うが妻の姿を見喪って了う。そしてふり返って見ると妻はカウンターに座っている。晴展はここで自分

の妻は昨年蜘蛛膜下出血で死んだことを思い出す。そしてJRのホームで越智が抱えたサクランボの包みは進入してきた電車によって撥ね飛ばされ、あたり一面にサクランボが撒き散らされるのである。この結末を見ると森内の〈老い〉は美しいものである。朝日新聞のエッセイの最後に森内は次の様に書く。

小説に対する考え方も変わった。光がおよんでいるがゆえに、即ち影がある。よって光を描くために、私はもっぱら、その影の世界を書いてきた。ところがいまは率直に光を仰いで書きたい。太陽と死は、直視できないと言うが、私はこのもっともらしく、いかがわしい箴言を好まない。

死は〈老い〉であり、一方また〈老い〉は人間の死を意味しよう。そして光は……。これは森内の場合、カトリック信仰ということになるかと思われる。はたして『晒し井』はどうなのか。もう少し細かく見て行きたい。

二、発　端

『晒し井』は九つの短篇からなる長篇であると書いたのだが、その九つの短篇とは「晒し井」、「鵲の橋」、「いつもの花の」、「われから」、「松葉酒」、「石橋の舞い」、「方百里雨雲」、「か行きかく行き」、「夕星の歌」の九篇で月刊誌『群像』一九九五年六月号から二ヶ月ずつ一篇、最後の「夕星の歌」は一九九六年十一月号に載ったものである。これらを一部手直しして次の年一九九七年五月に『晒し井』として講談社から出版された。

場所と登場人物であるが、これは作者が特定できないようにしてある。が東京のさる町加古町から狭間町に至る界隈であるが二つの町名は架空のものである。人物であるが、私が興味を持った重要人物は、聖三木教会の主任司祭を司めるオドワヤ神父、煙草屋沼崎友敏、希代社々長群山勉及び妻清美、娘きよ、社員のジム・オドリスコールと鳥越信介である。希代社は子供（三歳から七、八歳）の絵本を出版する会社であり、名前は郡山の一人娘きよから取った。

この小説の主人公はあるようでないのだが、あえて言えば郡山勉と沼崎友敏であろうか。冒頭、三木教会告解室にてオドワヤ神父が郡山勉らしき男に赦しの秘跡を与えるところから始まる。郡山は大の愛煙家でありピース、キャメル合せて一日四〇本は吸う。又非常に孤独に弱い男で四十年近く畳半分の売場に座って商いをしている沼崎と話をしたかったという設定である。郡山から見ると「自己に耐えられる男は尊敬されるべきである。」ということになる。沼崎友敏は六十二歳であるが髪は黒々としており、別に健康管理をしている訳ではないが、五十八歳の郡山より若く見える。

沼崎の肉体的美点はそれだけではなく「爪の手入れが行き届いた指先は繊細で、細く尖り、指の腹は淡く薄紅の色をしている。」まるで

その様は郡山の娘きよの指先のようだった。そして郵便受けにいつか何か素晴らしいものが入っていないか、と期待しているのである。そのくせ自分からは一切ハガキや手紙の類は出さない。そういう男が沼崎である。が最近妙な空咳とタンに悩まされるようになる。沼崎友敏の名前は「この谷端通りの路地へ一九四九年昭和二十四年から住みついた大工の船水大吉・かね夫妻」特にかねさんの功績で彼女は「町会費二百円の集金役を二十年勤めているので四十六年かかって」分かったのである。それまでは「帳簿にも、ただ煙草屋とだけ記されていた」のだ。

ついでに言うなら大工船水大吉は現在六十六歳であるが、六十歳のとき脳梗塞で倒れたのだが生来頑健な身体であったのか今では立ち直っている。この大吉は外に対しては「すんません」、家の者に対しては「弱ったなあ」のほとんどこの二語で対処してきた古い日本人である。

希代社は二〇坪に少々欠ける地所に立つ二階建ての建て物であるが、そこの社員の一人ジム・オドリスコールは身長一八〇センチ、体重百kgを越える巨漢である。日本文化史研究が目的でヨーロッパの西のはてから日本に来た。ジムはオドワヤ神父からホームステイを頼まれ、そのまゝ希代社に住み込んで了ったのである。ジムは日本文化に関する特殊な知識を持ち社長の郡山も分らなくなるとジムに聴くほどの日本通である。しかし、同僚の鳥越進介によれば「いまだ二十九歳でいて、良寛を臨書するに夢中なのは嘆かわしいことだ。（中略）短歌については正岡子規が歌は書に劣る、と記している。では前人未到の草仮名の世界という書はどうか？」ということになるが、進介は書については批評できない。だが良寛の書「今日食を乞うて雨に逢った」を読み、彼は「稲光のようなものに打たれた思いがし」、「何十億光年もの宇宙の果ての凍りつくような良寛の孤独への認識を知った。」のである。それから進介は煙草屋沼崎に興味を持つようになる。

緯度の関係で冬には滅法強いが暑さには弱いジムは、血が常に熱く毎朝ステーキとフライドエッグ六個を平らげる。もう一人の社員鳥越進介は『晒し井』後半部において活躍するのであるが、東北大の美術科を出てその後、専門学校でデザインの勉強をし郡山勉と共に五年間過ごすのである。

彼等を取り巻くように枝里奈酒場のチイ婆さん、美容院の女主人、瀬戸物屋主人佳美、沼崎友敏とは全く関係がないが、沼崎を脅迫する男などが登場する。あとは特に変った所はない。正にこれらは日常のものかも知れない。強いて非日常を求めればオドワヤ神父から「自分の井戸の水が一番おいしいから、それを汲みなさい」といわれた郡山勉が時々、蒸発することであろうか。元来カトリック教徒である郡山は自殺することは許されない。自分の井戸は汲みつくしたと思った彼は「絵を描く仕事で生きてきて画想と命の湧水が涸れかかり、水脈の流れの豊かさ、奔流の強さを求めて」麻薬に頼ろうとするのだが失敗した。

『晒し井』の問題点は煙草屋沼崎友敏の孤独である。一九九四年の

時点で四十年近く畳半分の店に坐わり続けた沼崎。彼がこのまま生涯を終えれば、変屈なおじさんの死ということになり、実に東洋的な結末で済んだと思われるが、「知ることは愛である」という命題はジムに言わせれば「郡山勉が煙草屋沼崎友敏に関心を寄せ、四十年も一人きりで店に坐り続けてきた男の心を掘り起こしにかかったについては、日本人の本性と異なった精神の働きであって、それが間違いのもとではなかったか」ということになるのだ。しかし、私の見た所、沼崎の孤独は本物ではない。

三、沼崎友敏の孤独

前にも書いたように沼崎は孤独である。しかし、自分では孤独とは思っていないらしい。年間二百円の町会費も払わず利の薄い煙草屋を営み、四十年近く畳半分の売場に座り続けている沼崎友敏。全てそれは仕方がなく、彼に降り懸った災難であり、面倒なために彼はフロにも入らない。洗濯物はない代り、着ているものが異臭を放ちどうしようもなくなるとそれを脱いで新しい物に代えるのだ。大工の船水大吉に言わせると「あんなケチないですよ。変ってんだから。それに臭いんだなあ。風呂にはいんないんだ。ずっとだよ。あの人に会いたがる郡山さんも分んないな」ということになる。その郡山だが沼崎と伊里奈酒場で一緒に酒を飲むのは初めてである。三十年間煙草を買うため煙草屋に通いつめたというのに。

沼崎はもともと一人ではなく若い頃一度結婚しているのだが、新妻は日ならずして彼のもとを去った。つまり妻に逃げられたのである。「どこかで生きているならば、五十歳も過ぎたはずだ。家を出て行くとき、自分の痕跡を何一つとして残していかなかった」のである。しかし、沼崎の次の科白は重要である。「焼け死んでみるか?」初めて沼崎は死を思うのである。これは「鵲の橋」であるが、この中で「ローマ信徒への手紙」の引用がある。恐らく次の一節が重要なのであろう。「見えるものに対する希望は希望ではありません。」これは沼崎にとって何を意味するのか。この頃から沼崎は「火事になると困りますから、家を出て行きなさい」という文面の脅迫状を受け取るようになる。「この家を出」たら行き場のない沼崎である。その脅迫状が白いただの紙になった。

三章「いつもの花の」花は〈ひまわり〉を象徴しているだろう。妻に逃げられた沼崎は密かにイタリヤ映画『ひまわり』の女優マーシャ役のリュドミラ・サベリーェワを愛し、プロマイドまで持っていた。それを郡山に探ぐられて了う。沼崎は何故郡山が自分に接近してくるのか分らない。ただ「怪しいヤツだ」という認識があるだけである。そのような沼崎であるが、期日を指定して会う約束をしたのに、約束を守らぬ郡山に腹を立てる。自分が先に約束を破ったのにである。気が狂った郡山（沼崎もジムもそのように思っている。）であるが、沼崎はマーシャに似た郡山の妻に初めて枝里奈酒場で会う。この章にはヨブ記三十二章十八節の「言いたいことはたくさんある。腹のうちで

霊がわたしを駆り立てる。」が引かれている。郡山にはマーシャに似た妻がある。しかし、自分の井戸は枯れ果てたと思い今は蒸発している。一方沼崎は四十年近く一人身を通してきた。そして妻を娶るなら「ひまわり」のマーシャの様な女性と思っていたのが初めて清美に会い、彼女がマーシャに瓜二つであることを発見する。あく迄も、しとやかで夫想いの彼女。進介もきよではなく母親の清美を愛しているようだ。沼崎は初めて清美にあって「ほんとにあんな人がいるんだ、考えなくてはならない」と思ったのは沼崎の六十二歳のとき、あと一年ちょっとで焼死する間際であった。

私が言いたいのは人間の欲望は際限もないがどこでそれが満たされるのかということである。一生涯満たされないのが普通であろう。たまたま郡山勉が沼崎の〈孤独〉に興味を持ったのが切っ掛けで、初めて〈愛〉を知った沼崎は仮令それが己の死の一年前であっても幸せというものである。

四章「われから」で煙草屋沼崎は斜め向かいの中学校生徒のマラソンを見て、自分の喪われた青春を想い「羨望嫉妬焦燥後悔」にかられる。そういう沼崎が郡山を煙草の包みを持って見舞う。偶然その姿を見た近くの美容院の女主人はあまりの沼崎の変わりように店へ戻るなり叫ぶ。「ねえ、アタシに塩まいてよ」

沼崎の食生活は貧しい。これまでは「一日三度、質素ながら自分でこしらえていた食事を」、「向かいのコンビニエンス・ストアで弁当、おむすび、サンドイッチ、インスタントラーメン、ヤキソバを買ってすませ」、「茶、コーヒー、ジュースのたぐいは一切口にせず、水だけをごくわずかにとる。」ほぼ三年これで通し、菜もイワシの缶詰と質素であった。煙草屋の中は紙屑、新聞紙の山であり脅迫犯が脅す理由にもなっていた。マッチ一本でいつでも火災が起きる可能性があった。相変らず風呂には入らぬ沼崎ではあったが、死の数ヶ月前から服装には心を遣い、「明るい色柄の品物を買ってきて、着ていた」のである。「しかし沼崎は最近めっきりと老け、夜のトイレ通いの回数が増えている。」最終章「夕星（ゆうづつ）の歌」で彼は不思議な言葉を吐く。「マーシャに会うか」というのだが、彼にとって生身のマーシャとは郡山の妻清美である。気が狂ったとされる郡山の家に単身のり込めば追い帰されるのが落ちであろう。あと確実に清美に会えるのは教会だけである。敬虔なカトリック教徒である清美は必らず日曜日のミサには行く。四月七日（日曜日）、きよ二十二歳の誕生日に清美、きよ、進介、ジムは聖体拝領を受ける。そのとき清美の眼と沼崎の眼があう。「清美はまったく意識していなかったが、沼崎は弾かれたように聖堂を出て」行くのである。沼崎はあと七ヶ月後には焼け死ぬのであるが、郡山によっていろいろな刺激を受け他人の妻を一目見ようと教会にまで出かけるのである。七月の終わり郡山の娘きよがジムに頼み、沼崎という男を確かめるため煙草屋に行く。沼崎をジムの陰から一目見たきよは「あの人に罪はないけれど……」の科白を吐き涙を流す。きよの父は再び蒸発しているのである。

四十年近く一人身で畳半分の広さの売り場に座っていた沼崎は「大

雨の夜、不審火で家ごと焼死し」て了うのだが、死ぬ一年前の彼の前に展開するでき事は一生涯何事も起らず焼死する場合と比べてどのように違うのか。沼崎にとって本人の責任とはいえ自分の失われた青春、出ていった妻のことなどいろいろあるだろうが、彼自身にとって最も大切なものは何であるのか再考して見たい。それはやはり一方通行とは言え〈愛〉を知ったことだろう。不意の郡山の侵入によって一見平安を乱されたかのように感じ最後まで自分に近づく者は「怪しいヤツ」と思い込んでいた沼崎であるが、いつの間にか、郡山が訪ねてくるのを待つようになる。郡山と沼崎の波長が合ったのか、枝里奈酒場で一緒に酒を飲むようになる。そして郡山の妻清美を知る。この後は私の勝手な判断になるが（というのは読者には何も知らされていない）郡山が再度蒸発し、沼崎は独りでグラスを傾けていたに違いない。短期間のうちにビール一本の彼が五合の焼酎でも酔わなくなるのだ。沼崎は郡山と話をつけるために何度も枝里奈酒場に足を運んだことだろう。しかし、郡山は居ない。彼は再度蒸発しているのだ。

四、郡山勉の孤独

もう一人の主人公郡山勉は五十八歳であるが、沼崎は自分より若いと思い込んでいる。又郡山は森内の分身とも云える存在である。郡山勉は五〇代後半において、自分の「画想と命の湧水が涸れ」はてたと思い込み、「水脈の流れの豊かさ、奔流の強さを求めて」薬に頼ったばかりに気が狂れて、一端希代社に帰り妻清美の必死の看病で持ち直したものの、身体が良くなると自分の故郷である仙台の近くの塩釜まで娘きよを同道し、三十代前半の女性と姿を消す。この部分は実に自然でしかも郡山勉の考え方も良くでている。要するに「回復の見込みのない病人は、死んだほうがいい」ということであり、画想が得られなければ全く違う人生を歩むべきだということになる。「だが、汲みつくしたと思う底には、それが沈んでいた。」にもかかわらずである。

かくして郡山勉は蒸発した。蒸発後の郡山の消息は杳として分らない。しかし、郡山は希代社の社員は勿論、枝里奈酒場のチイ婆さん、一見関係のない煙草屋沼崎までが、郡山の復活を希んでいた。その郡山が二度目の蒸発後聖三木教会で復活しかかる。復活しかかるとは変な表現であるが郡山勉は九月十三日の夜聖三木教会を訪ねる。その姿をジム、清美、きよの三人が見ている。彼の跡を追いすがる形で教会に三人が入るのだが、今は無人と化した教会に彼の姿はなくきよの声だけが虚しく響くのだ。これは『晒し井』の最終章「夕星（ゆうづつ）の歌（うた）」であるが、郡山勉は結局蒸発したままである。郡山の画想が若い頃のように湧いて来ない思い込みは強いのであるが、オドワヤ神父の助言を無視してまで第二の人生に入ったということは、彼の第二の人生に対する思いが殊の外強かったからと言えないこともない。第二の人生は楽かどうかは分らない。ただ感じるのは、郡山の肉体上の〈老い〉が、歩いていて汗が必要以上にでるのは肝臓が弱っているからにちがいないというものであり、しかも自分の推量に過ぎないのである。郡山勉

は蒸発したが、蒸発する直前娘きよは父と共に茶を振舞われるが、父が振舞われたのは茶ではなく酒であった。その描写は素晴らしい。

飲み初めは新緑ですすがれた風のように軽いが、飲むほどに味は深く濃くなり、果てはきりっと立った凛然の風格で迫ってくる。この酒を知っていて、拒むのはきわめてむつかしい。現に、もう乾きかけ香りが変質しているはずなのに、ぐい呑みがわりの汲出しの底から立ち昇ってくるのは、樹幹に手斧を叩きこんだ傷口からの樹液のような匂いだった。

結び

最初に私はこの小説の問題点として〈老い〉を取り上げた。〈老い〉として先ず考えられるのは沼崎友敏であり、彼の〈老い〉は死の一年前迄は寧ろ他人よりも若く見えたのである。それが死が近づくにつれ「夜のトイレ通いの回数」もめっきり増え、結核を思わせるへんなせきをするようになる。明らかに肉体上の〈老い〉が沼崎を襲う。次に郡山の〈老い〉であるが、五十八歳の郡山は六十二歳の沼崎を自分より三つも年下だと思っていたのだ。郡山は若いときのように画想が自由に湧いてこないもどかしさ、あるいは若いときのように「水脈の流れの豊かさ、奔流の強さ」は求められないと思い込み第二の人生を求めて蒸発する。〈老い〉は両者とも避けられないものとして描かれてはいるが郡山の場合、特に人を信用するかどうか重大な問題であろう。

『晒し井』の意味であるが、小学館の国語大辞典の最新版を引くと「井戸」に関係のある「サラス」意味は関係するものが三つあって、①太陽のもとにさらす。干す。②風雨にさらしておく。③あらわに人に示す。あまねく世間に知らせる。などであるが、この井戸は元々沼崎の狭い庭にあり、「かつて地底には昔の谷端川とは別の水脈が走っていて、いくらでも清潔で冷たく澄明な水が汲めた」のに今では「半袖シャツの下着一枚になって、昔からのポンプ井戸の鋳物の柄を」いくら押しても、「呼び水に、バケツ二杯をあびせ」ても「息絶える人の喉のような音を響かせるだけ」であり水は上がって来ないのであった。

つまり、沼崎は運動不足解消のため、毎日定期的にポンプの柄を押すのであるが水は上がって来ない。そういう井戸が陽に晒らされて、風雨にあたったままになっている状態を表し、一度〈老い〉を迎えたものは決して、元にもどらないことを現わしているのだろう。

一方郡山の〈老い〉も関係ないことはない。一方的な郡山の想い込みであるにせよ、〈老い〉は確実にやって来て、決して元にもどることはない。しかし、郡山の〈老い〉は人為的であり、神父の助言も聴かず自分の想い込みであるとしたら、彼の人生にとり返しのつかぬ事になって了う。たとえ第二の人生を得たとしても沼崎の場合と比べてあまりにも喪うものが大きいのではなかろうか。

つぎに、朝日新聞のエッセイについてであるが、彼はクリスチャン作家らしく光を描くために影を書くという。これを二人の〈老い〉を迎えたと思われる沼崎と郡山にあてはめると、彼らの光と影、はっきり言えば沼崎の愛と焼死、郡山の第二の人生と、画想が喪われたことは良いとしても、二十九歳となった二人の社員、鳥越進介とジム・オドリスコールの光と影はどうであろうか。二人の青年、進介の死、ジムの帰郷は影である。この二人にとっての光とはきよとの愛の実現ではなかろうか。この愛は十分描かれているとは思えない。寧ろ、書くことを控えたのではないかと思われる。そうであるとするなら「太陽と死は、直視できないと言うが、私はこのもっともらしく、いかがわしい箴言を好まない。」と朝日新聞に書いた森内の文章はどうなるのであろうか。

きよ二十二歳の誕生日、四月七日は復活祭である。郡山勉が蒸発したのは四月六日であるが、復活祭の日、オドワヤ神父は珍しく長い激しい説教をした。「—前略—ミステリーを追い払ってしまっては、人間には何も残らないのです。イエス・キリストの復活こそミステリーです。—後略—」最後に彼は拳で説教台を打って説教を終えた。この部分は遠藤周作の持論である「多くの日本人はこの復活の思想に弱い。」と共通し、それに反論する形でオドワヤ神父の説教となったと見るのである。〈復活〉に対する考え方も遠藤と森内とでは微妙に違う。遠藤の場合〈復活〉は当人のイメージが心に復活するのだが、『晒し井』の場合、きよのテクニックとして当人のイメージが復活するのである。『晒し井』の最後のシーンであるが次のようになっている。

その夜（西谷注、九月十三日のこと。）から二ヶ月が過ぎた。十一月だからインデアン・サマー、小春日和といってもよい午後、きよは郡山の好んだロウソクの焔のマークがついた2Bの鉛筆で、絵本の下案をして絵を書いていた。スケッチブックの中で、混沌、多くの謎を背負ったまま行方を絶った郡山勉が復活した。大雨の夜、不審火で家ごと焼死した沼崎友敏、枝里奈酒場のチイ婆さん、天真爛漫をもじったニックネーム、テンシンさんこと鳥越進介、たった二つの決まり文句、「すんません」「弱ったなあ」で生き抜いたあとで、好きな酒を飲みながらやすやすと死んだ大工船水大吉、故国へ帰ったジムもよみがえった。—後略—。

最後に希代社に残ったのは清美ときよの二人だけであるが正に作者森内が言うように希代社物語はこれから始まるのである。

参考文献

安藤聖空『書のこころ』柏書房　一九七九
ミシェル・パストゥロウ『ヨーロッパの色とかたち』創元社　一九九七
赤岩　栄著作集　教文館　一九七〇～一九七二
チェンニーノ・チェンニーニ『絵画術の書』岩波書店　一九九一

青山杉雨『作品1・2』二玄社　一九九四
伊藤松宇『風俗文選』岩波書店　一九二八
明治文学全集五三　筑摩書房　一九七五
同右　五六　〃　一九六七
同右　九四　〃　一九七四
同右　九九　〃　一九八〇
同右　総索引　〃　一九八九
国語大辞典（全十三巻）小学館　二〇〇二

An Essay on Toshio Moriuchi's *Sarashii*

Hiroyuki NISHITANI

Sarashii was fist published in May 1997 by Kodansha. There are two heroic figures in the book, Tomotoshi Numazaki and Tsutomu Koriyama. Numazaki operates a tobacco shop in addition to selling soft drinks and a variety of teas from a vending machine. Koriyama is the president of a small company dealing in rare children's books that has four employees: his wife, Kiyomi; his daughter, kiyo; Shinsuke Torigoe; and Jim Odorisukoru. Koriyama and all four of his employees are Christians, and the illustrated books the company sells are for children between the ages of three and eight.

Numazaki has been sitting alone in the same tiny stall (1 sq. meter) for 40 years, and Koriyama has always felt a sense of respect for him for being able to do so. At age 58, Koriyama lost his ability to create inspired illustrations, so in order to start a second life he simply disappeared. Because Numazaki the tobacconist never bathed, he always emitted a foul odor. Tragically, in the end he burned to death when his house caught on fire.

This is the first time that the author, Tohio Moriuchi, who is a Christian himself, has grappled with the problem of old age.

Key words; Tomotoshi Numazaki, Tsutomu Koriyama, Love, Loneliness, Old Age